

生存科学研究 二二一入

VOL. 7, NO. 1, 1992, 1, 10, 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

第2回 人間・文化・文明 研究会 人間・文化・文明と生存科学

11月9日(土)午後2時より、研究所会議室において、第2回「人間・文化・文明」研究会が開催された。会議には熊谷理事長、本研究会座長の板垣顧問の他、高瀬、戸沼、向山の各委員と、事務局側として小平専務理事他が出席。第1回の際に都合で行われなかった、板垣座長自らの発表が行われた。

* * * *

板垣座長は、始めに“人間と自然とその間を繋ぐ生命があり、その質的向上(発展あるいは進化)を含む存続を考えるのが生存科学である”と考えるが、その研究を進めることが、自分が武見先生から最後に託された課題であると考えている。生存科学は理論と歴史と実践の統一認識であり、過去、現在、将来への対応が必要である。生存の理法は認識論的ではなく存在論的概念である。”と前置きしてから、普遍が特殊を包摂する文化の文明化、生物の環境への受動的ばかりでない能動的・創造的・革新的適応、分析的・実践理性的・反省的判断力を総合的に使う判断力、歴史のなかに働いている論理を掴んでの判断であるカタロゴス等を説明し、生存の理法を考えるには容態を掴む判断力が必要であると説いた。さらに、生存の理法に基づいて環境を

再形成するには、政策と制度のシステムが必要であり、その実践として政治、経済社会の再形成が必要であるが、人間の生活は美しくあらねばならない、多様性に即した相互依存関係をどう作るかが課題であると説かれた。

* * * *

その後小平専務理事から、分析的・論理的の研究を行いながら、それをアナログ的・総合的に判断する研究にも取り組まねばならない生存科学の研究において占めるこの研究会の役割りについて説明がなされ、また、高瀬委員から、秩序形成にはこれまで排除してきたカオスを組み込むように努力すべきこと、生存を考えるには、対立しつつ相互補完的であるという両義性が必要であり、生と死とその中間を考えることが必要であることが述べられ、戸沼委員からは、街づくりには生存の理法と生活の作法が必要であること、生存の理法は生態学的に掴むのが良いことが、師岡委員からは産業も生産から生存へと目標を転換する必要があること等が述べられた。

第1回 東西の健康観・ 医・薬 勉強会 まずは混沌から

11月8日(金)午後2時より、第1回「東西の健康観・医・薬」勉強会が開催された。第1回はこの勉強会の幹事である東京医

科歯科大学難治疾患研究所津谷喜一郎氏から「まずは混沌から」と題して発表があり、広範囲に及ぶ本会の扱うべき分野、テーマに関して以下についてのレビューがなされた。

(1) この分野の多様性と、用語の定義の曖昧性

(2) “オリエンタル”の地理的概念の歴史の変遷

(3) 東西ともに南北の視点の重要性、特に途上国での広い意味での“伝統医学”の役割

(4) 1960～70年代のアフリカ、中国におけるリバイバル

(5) 種々の保健問題解決のためのリソースとしての伝統医学、そのシステムの多様性

(6) プライマリ・ヘルス・ケアと東西医学の結合

(7) 世界的生態学ブームと科学的評価

(8) 東洋医学に対するステレオタイプの見方

(9) 東洋医学のリバイバルにおける“西洋(人)”の意味

(10) アメリカからみた東洋医学と、途上国・先進国双方における広い意味での“伝統医学”という視点、文化と経済と哲学との関連という多面的アプローチの重要性。

発表後活発な討論が行われたが、今後の会の進め方について、テーマや運営などに対するアンケートが、当日の不参加者を含め全員に配られ、参考とすることになった。

第4回 医薬問題 研究会

1) 免疫学研究の最近の話題

2) 化学物質の評価

—免疫毒性学の立場から

11月25日(月)午後3時より第3回「医薬問題」研究会が開催された。今回は免疫をテーマとし、ヤクルト専務取締役大沢利昭氏から「免疫学研究の最近の話題」と題しての、昭和大学薬学部教授黒岩幸雄氏から「化学物質の評価—免疫毒性学の立場から」と題しての発表がなされた。

大沢氏は、専門の免疫学の立場から、免疫の概念を変える大きな原因の一つとなった接着物質についての最近の研究について発表した。

生命現象は細胞間の相互作用から生まれてくる。その最も典型的なものが免疫現象といえる。免疫において細胞間相互作用の主役をなすものは、作用をメディエイトするリンホカイン等の物質だが、それを役立たせるには効果的に運ぶ生産細胞と標的細胞間の細胞接着が必要である。この接着に働く接着分子の研究が進んできたが、接着分子は細胞を接着するだけでなく、細胞内に情報を伝えるうえでも必須のものであると分かってきた。今後は接着分子による免疫抑制あるいは調節、さらに炎症、癌転移の抑制といった治療応用も有望であろうと考えられる。

黒岩氏は、免疫毒性学の立場から、医薬品および化学物質が免疫機構の異常を引き起こすことが分かってきたが、免疫毒性を技術的にしっかり押えることが今後の医薬品の進歩に不可欠であると主張され、そのための取組について述べた。

第2回 生死と生存 勉強会

医学倫理か生命倫理か

12月3日(火)午後2時より、第2回「生死と生存」勉強会が開催された。今回は上智大学教授アンセルモ・マタイス神父をゲストに迎えて、「医学倫理か生命倫理か」と題する話を伺った後出席者全員でそれを話題に討論をおこなった。

マタイス神父は、上智大学での講義に際して学生が生命倫理に割合関心が深いことを紹介し、それは現在の社会がそれに関心を持たなければすまない状況にあるからであろうと指摘した後、夫々に自身の考え方を示しながら以下のような広範囲に及ぶ話をした。

* * * *

倫理学のなかで生命倫理的なものは40年前頃医学倫理と呼ばれていたが、その原形は

ヒポクラテスにある。それは今尚生きており、そのなかには人間に対する愛（フィラントロピア）がある。その概要は、医師は常に患者の善を目指し、害を加えてはならない、哲学・哲学者的性格の必要、積極的安楽死の否定、（一方で不治の患者の生命をむやみに引き伸ばすことは好ましいとは言えないとも言う）、新たな医学知識は、失敗を含め独占せず公表せよ、職業上の秘密の厳守、危篤の場合その容態を患者に告げない、等々である。

それではどうして医学倫理ではなく生命倫理（バイオエシックス）が言われ出したのか。そこには2つの違いがある。

1) 医学倫理は医学・医師のための倫理であるが、生命倫理は学際的倫理である。墮胎、人工受精、代理母、脳死、死の選択等法学的、保険問題、医療の南北問題、移植臓器の不足・配分の問題等経済が、輸血拒否の宗教等宗教が関係してくる等々。

2) 医学倫理は医学者の守るべき倫理であるが、生命倫理は医師だけのものではなく、全ての人々が考えなければならない問題である。治療の多様性や価値観の多様性から、インホームドコンセント・選択・自己決定・自律が求められる等々。

結論として以下の3つを上げたい。

- (1) 患者・国民の成熟と自律の必要
- (2) 医療の人間化の必要
(それには医療の透明化の必要)
- (3) 人間に対する愛の必要

第4回 家庭問題 研究会
老人保健法の諸問題

12月20日（金）午後6時より、平成3年度第4回（通算第8回）家庭問題研究会が開催され、永井病院院長永井宏氏が表記のテーマで発表した。

永井氏は、老人保健法による検診、特に癌検診の現状を、老人保健事業第3次計画に関する公衆衛生審議会の意見、宮城県日母施設

検診、子宮頸癌検診、その他各種の公衆衛生関係統計を資料としながら以下のように説明し、その問題点を指摘した。

老人保健事業第3次計画に対する意見では、集団検診から個別検診への移行、個人情報の有効な利用、70才以上の高齢者の寝たきり予防施策の推進等が主張されている。

胃癌検診、子宮癌検診は効果が明瞭であるが、肺癌検診、乳癌検診は発見率、予後に問題があり、撮影法や画像診断の導入が検討されている。撮影による放射線被曝や、検診のコスト等から、コスト・ベネフィット分析、コスト・エフェクティブネス分析による評価も問題となるが、日本と諸外国では医師の技術料の差などから評価が異なってくる。

東北地方では、高齢者が検診を受けることに対し「いのちじが汚い」と言って受けない傾向が見られる。これが検診の受診率の低さに繋がっているのかもしれないが、そういう考え方も文化の地域特性の一つなのかもしれない。

地域住民に対する検診は、精度管理がうまく出来るシステムが確立しているが、事業所での検診には、私的検診機関が関わっていてそのシステムから外れていることがある。そのために精度に問題があることがある。

九州プロジェクト研究
肝属郡医師会病院に関する検討

九州プロジェクト研究の一環として、11月7日（木）午後2時より、研究所会議室に肝属郡医師会病院今隈満管理担当副院長を迎え、肝属郡医師会病院に関する検討が行われた。会には九州プロジェクトのメンバーで医師会病院のベテラン、吉川暉、弓倉藤楠、梅園忠の各氏も出席。

今隈副院長は、医師会病院の役割と特徴、肝属郡医師会立病院の機能、増床の理由、経営上の問題点、さらに医療・保健・福祉推進体制とその不備・不足を説明、今後に対する提案を試みた。また弓倉氏から僻地型の肝属

郡医師会病院と都市型の熊本市医師会病院との比較検討がなされ、これを巡って出席者が討議し今後の対策を検討した。

九州プロジェクトではこの他、11月21(木)、22(金)の両日にわたり大分、別府を訪れて現地での会議を開催している。

第2回 生存科学シンポジウム
プログラム

日時 平成4年1月18日(土)
午前10時～午後5時30分

場所 上智大学 10号館講堂
千代田区紀尾井町 7-1

メインテーマ

生存科学における発展・II

特別講演(1) 生態系の多様性と持続性

千葉県立中央博物館館長

千葉大学名誉教授 沼田 真

座長 上智大学教授 青木 清

特別講演(2) 「生きること」と
「よく生きること」

京都国立博物館館長

京都大学名誉教授 藤沢 令夫

座長 生存研 顧問 向山定孝

総合討論

話題提供

早稲田大学教授 小嶋謙四郎

東京医科歯科大学 津谷喜一郎

八千代国際大学教授 高瀬 浄

座長 帝京大学教授 江見康一

国立小児病院院長 小林 登

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 門司フェロー

Takemi Seminar

11/4 Health of the Urban Poor
/Nafsiah Mboi-Walinono

11/25 Combatting Diarrheal Disease: The
Development of Research & Policy
Issues /Richard Cash, MD, MPH

12/9 Managing Health Research:
Developing Countries The Essential
National Health Research(ENHR)
/Adetokunbo Lucas

Takemi Forum

11/8 Framework for Health Development
for Policy Makers
/Dr.G.L.Monekosso

Takemi Luncheon

11/7 Clinical Consequences of Unsafe
and Induced Abortion in Nigeria
/ Friday Okonofua

Faculty Research Seminar

12/16 The Visual Exploration of Complex
Data Sets Using Computer Imaging
:The Example of HIV Surveillance
in Thailand /Uwe Brinkmann

1992年度武見フェロー

日本からの推薦者決定

11月25日(月)の第1回選考委員会における書類選考、12月16日の第2回選考委員会における面接をへて、1992年度武見フェローの日本からの推薦者は吉田亨氏に決定された。

氏は、1953年生まれ、東京大学医学部保健学科卒業、同専門過程博士課程終了後引き続き同学科保健社会学教室に勤務。研究テーマは「アジア・太平洋地域の都市化社会における自発的問題解決能力の形成過程」。

研究所日報

11月1日 常務理事会
11月8日 広報ワーキング・グループ
会議(研究所資料集作成)
11月18日 編集委員会
同 第5回武見国際シンポジウム
実行委員会・組織委員会
合同委員会
12月10日 関西センター研究会準備会